
Destiny love

syon

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Destiny love

【Nコード】

N5925Z

【作者名】

syou

【あらすじ】

「それが運命なら、神様は見捨てない。絶対に」

彼女が封印を解いた時、二人の運命は動き出す。

prologue

「大丈夫、霧は晴れるよ。明けない夜が無いようにね」
叶野三郎『四人と宝』

忘れなきゃ、忘れなきゃ。

私は、彼にもらった原稿用紙を本棚の奥に隠す。ずかんの後ろに入れておけば、気づかないだろう。

胸が、ぎゅつとした。苦しい、いたい。それと同時に、彼の顔を思い出す。そしてまた苦しくなる。

「あきらめなきゃ、いけないんだ……」

手に持っている写真に、ぽとつと涙が落ちた。弱い自分を内心で怒る。なさけないじゃない、私。しょうがないでしょ、もう逢えないんだから。

国語辞典に彼と二人で映る写真をはさむ。そのページの単語に『恋』があつた。私は見ない振りをして国語辞典を閉じた。

「これで、おしまい」私はそうつぶやく。

「嫌だ」と誰かの声が聞こえた。私の声だった。

12月19日

「隠したって見つかるんだ。無駄な事はやめておけよ」
叶野三郎『四人と宝』

ドアが開く。

その音で、何が足りないのかを考えていた私の思考は中断される。机に座る私は、顔を黒板側のドアへ向ける。そこには、私を見て穏やかに微笑む彼がいた。

「少し、遅くなったな」

そこには私の彼氏 幹夫^{みきお}がいた。

「待たせすぎ！ 五分は待ったよ」五分ということを強調するため、私は手をパーの形にして彼に見せる。

「五分くらい許してくれよ」幹夫は苦笑する。

「幹夫わかってる？ 高校生カップルにとって放課後の五分って言うのは、すっごく大切なものだからね」今度は大切さを強調させる為、椅子から立って仁王立ちになる。

「はいはい。申し訳ありませんでしたー」彼が気持ちのこもっていない謝罪をする。その態度に少し苛立つ。

「何その謝り方！ うざー」

「俺なりの愛の印だよ」

「そんな愛ならいりません」彼を鋭く睨む。彼の、こういう空気の読めない所が嫌いだ。

「冗談だよ」

「わかってる」

彼が口を閉じた。何でこんなに怒っているんだ、という顔をしている。幹夫の所為でしょうが。

「あのさ、今日お金何円くらい持ってる？」

「貯金中」

「じゃあさ、これからデートしない？」こいつは話も聞けないのか。私は呆れる。

「貯金中って言ったでしょ。馬鹿じゃないの？」

「あそこのココア、美味しいよね」

恐らく幹夫は、私がそれで釣れると思っているんだろう。確かにC・C・Cafeのココアは美味しいが、何と浅はかな。

彼が自信満々の顔でこちらを見ている。私は心の中で溜息をついた。しょうがない、乗ってやるか。

「まあ、奢ってくれるなら行ってあげてもいいよ？」

幹夫がにやにやと私を見る。「相変わらず素直じゃないなあ」その言い草に少し苛立つ。私があんたの提案に乗ってあげたんですけど。

「うるさい！ 行くんでしょ」私は机の横にかけてある茶色のバッグを背負う。

「それじゃあ行こうか」彼がそう言っ、私の手を握る。まったく調子がいいんだから。

落書きで埋まった黒板、色褪せほつれているカーテン。それらにさよならを告げて、私たちは教室を出る。

木製のドアを開けると、鈴の心地よい音がした。

「お、いらっしやい」マスターの東野さんひがしのがグラスを拭く手を止めて、こちらへ軽く手を上げる。

「お二人さんいらっしやーい」中羽さんがメニューを持ってこっちへ来る。今日は灰色のカーディガンに、黒の膝下スカートを着ている。中に着ているフリルをあしらったワイシャツが可愛い。実年齢より幼く見える外見に、その洋服が良く似合っている。

「席は、いつもの所でいいでしょ？」

「ええ。お願いします」幹夫がそう言っ、中羽さんは私たちをいつもの席へ案内する。中をちらつと見る限り、どうやら私たち以外お客さんはいないようだ。

店内を見渡す。お店の中の大半の物が木で作られているからかとても落ち着く。前にマスターが「テーブルも椅子もキッチンもマグカップも木製だろ？　ここまで揃えるのには苦労したよ」と言っていたことを思い出す。

中羽さんは窓側の二つの席を引いて軽くお辞儀をする。

「はいどうぞ。飲み物もいつもの？」

「はい。お願いしまーす」

中羽さんは幹夫のオーダーを聞き、私たちの席から去っていく。軽快なジャズが店内に流れている。それに合わせるかのように、時計の秒針が音を鳴らす。

無言の空間。中羽さんとマスターはせつせとドリンクの用意をしている。幹夫はぼーっと外を見ている。私は、携帯を開いてメールが来ていないかを確認する。　新着メール、無し。私は携帯を閉じる。

相変わらず幹夫は外を見ている。何と気が利かない彼氏だろうか。じろつと彼を睨む。

「はいどうぞ」中羽さんが頼んだドリンクを持ってくる。ミルクティーとココア。頼んだものがすぐに届く。これこそがこの喫茶店の売りだと私は考えている。中羽さんはにこつと微笑んでカウンターへ戻っていった。

幹夫はまるで彫刻にでもなったかのように、ずっと動かず外を見ている。いつも陽気な彼が喋ったり動かないでいると、少し不安になる。気分が沈んでいるんだろうか。

「ねえ、幹夫？」

彼の体が、さながら抜けかけていた魂が体に戻ったかのようにぴくっと動いた。そして、今まで外を見ていた目を私に向ける。「どうしたの？　華奈子」

少し虚ろな目。どうしたんだろうか。

「ミルクティー、来たよ」

ぼーっとミルクティーを見る幹夫。寝かけていた人が起きた時の

ような、そんな感じだ。

「幹夫？」

「お、おう」彼は、微笑んだ。けど、無理をしているのがわかる。

「……どうかしたの？」

「いや、ちょーっと考え事をね」そう言っただけ彼はミルクティーを飲み始めた。

私もココアを飲むことにした。そのままでは熱いので、スプーンでココアをかきまわして冷ましていく。カカオの香りが、ふわっと広がる。その香りに、頬が緩む。

カップを触ると、まだココアは熱かった。これではまだ飲めない。ので、息を吹きかけて適温に冷ましていく。数度吹きかけた所で、そろそろ大丈夫だろうと私の感覚が告げる。取っ手を持って、恐る恐る口に近づけていく。カカオの香りが濃くなる。香りを味わいつつ、私はココアに口をつけた。

舌がひりつとした。どうやら、まだ熱かったらしい。その後すぐに、心地よい甘味が口を支配する。ココアは喉元を通り、体中にその甘さと温かさを広げていく。至福の一時とはまさにこのことだなと感じる。

「そう言えばさ」幹夫が口を開いた。いきなりのことだったので私は驚く。私に声をかけたのか疑問に思い彼の顔を一瞥すると、幹夫の視線はカウンターへ向けられていた。

「どうした？」マスターがカップをカウンターに置いた。中身は見えないが、恐らくコーヒードろう。マスター曰く「夕方辺りになると眠くなるんだよな」と欠伸をしながら言っていた事があった。何故それを客の私に言ったかは、今でも分からない。

「今日の二択って、何？」

「今日は『車かバイクだったなら、どっちが好き？』だ」

今日の二択とは『林檎と蜜柑ならどちらが好きか』のような二択問題を毎日マスターが考えてお客さんに出すという、お喋りが大好きなマスターらしい企画だ。どちらに投票されたかはちゃんと集計

され、投票が多かった方の選択肢を選んだお客さんは、次回来店時に一割引になるというサプライズもついている。

「あれ？ 前ははどうだったの？」やはり女声の性からか、私は一割引の行方が気になった。

「ミッキー達、前回来たのっていつだっけ」中羽さんが宙を見つめて、右の人差し指をあごにつけた。その仕草が可愛くて、私も自然にこういうのが出来る大人になりたいと思った。

幹夫が財布を鞆から取り出し、その中からC・C・Cafeのポイントカードを抜き取る。恐らく、前回来た日付を見ているんだろう。「ポイントカード見ると、今月の七日ですね」

今月の七日。私は頭の中にカレンダーを思い浮かべ、そこから記憶群に検索をかける。すると、臍氣にその日と思われる一場面を思い出してきた。

周りのみんなが騒いでいて、私は背伸びをしている。私も含めて、全員達成感のある顔をしている。黒板には時程のようなものが書いてあり、その横に現代文や英語などが書かれている。

期末テストの最終日か。そのことに気づくと、その日の記憶を断片的に思い出して行く。ああ、確か幹夫が「テスト終わりに一杯行かない？」とか言って私をここに誘っていた気がする。

「おお、七日ね」そう言ってマスターはレジの引き出しから、一冊のノートを取り出した。表紙に『今日の二択集』と書かれている。マスターはぱらぱらとそれをめくっている。

「マスター、何やってるんすか？」幹夫が訝しげな目でマスターを見る。

マスターがノートから視線を幹夫に移す。「今、華奈子ちゃんと幹夫くんが前回来店した時の『今日の二択』と、その解答を調べてるんだよ。ほら、レジでいつも会計終わったら書いてるだろ？それがこれだよ」ああ、あれってそうだったんだ。私はマスターのあの行動に納得する。

「おお、あったあった」マスターが目当ての場所を見つけたらしく、

ページをめくる手を止めた。「前は、コーヒーか紅茶だったらどっちが好きな二択だな。幹夫くんが紅茶で、華奈子ちゃんがコーヒーだな」

「で、どっちが多かったんですか？」私はちょうどよく冷めたココアを一口飲む。やっぱり美味しい。ココアは冷めても味が変わらず美味しいからすごいと思う。

「コーヒー。ということで、華奈子ちゃんがー割引」

「お、ちよつと嬉しい」何と言うか、バスケットで適当に放ったシュートがゴールに綺麗に入った時に似ている。私はふとそう思った。

そう思ってから、今日の支払いは幹夫だったと気づく。私の小さな幸福が消えていく。まるで、シュートが決まったのに実はダブルドリブルだったようだ。

「で、お二人はどっちに投票する？」マスターはそう言って、ノートをレジの引き出しに戻した。

「絶対車でしょ」

「絶対バイクでしょ」

私たちの声が重なる。

「えー！ バイクとかありえないでしょ」私は幹夫に指を指す。何で事故に遭ったら滅茶苦茶痛そうな乗り物に乗らなきゃいけないのか。車の方が安全じゃないか。

「いやいやいや。車の方がありえないから」幹夫が私に指を指し返して反論した。ありえないわけがない、と心の中で反論する。

「やっぱりバイクよね。ミッキーはわかってるな」中羽さんが幹夫に同意した。何であんな痛そうな乗り物を好むんだ、と不思議に思う。

「絶対車だな」マスターはきっぱりと大声でそう言った。どうやら断固として譲らないようだ。

「ですよね、^{ひがしの}東野さん」私は思わず身を乗り出した。同志が見つかったので、私は少し嬉しくなる。

「俺はさ、喫茶店のマスターをやる前は、月夜の狩獵豹^{チーター}と呼ばれて

「たんだぜ？」マスターは自慢げにそう話し出した。何だろう、すごく格好悪い。

「何、月夜の狩猟豹って」苦笑しながら幹夫を見る。何と云うか、父親が昔のことを自慢しているときのような感じだ。すごく事実を歪ませているのをわかっていいるんだが、ちゃんと聞かないと機嫌を損ねる。大雑把に言うと、そんな感じだ。

「どうやら幹夫もわからないらしく、右手を振って『わからない』のジェスチャーをした。」

「昔は走り屋だったんだよ、俺」満面の笑みで話し始める。「深夜に仲間が集まってゼロヨンしたりして、月夜中を警察に追われながら走ったもんだよ」マスターが顔を綻ばせながら一人で頷く。その時のことを思い出しているのだろう。

「華奈子ちゃん、大丈夫よ。いつもの嘘だから」中羽さんが笑顔でそう言う。やっぱりか、と私は心の中で呟いた。

「お前さ、信じてくれよ。本当なんだって」

「嘘に決まっているじゃない」中羽さんがきっぱりとそう言い切った。「あんた、免許は何色？」

「ゴールド」

「警察に捕まったことは？」

「お世話になったことは一度も無い」

「あのね、かすゆき和行」中羽さんが溜息混じりに、マスターのことを下の名前で呼ぶ。「走り屋だったら、スピードの出しすぎで警察に一度くらい捕まってもおかしくないわよ」

確かに、警察に追われているんだったら何回か捕まっていたもおかしきはない。私は中羽さんの主張に頷く。

「いつも逃げ切っているんだよ」当たり前だろうが、とマスターは胸を張った。

「いや、胸を張るところじゃないでしょ。そこ」幹夫がすかさず突っ込んだ。

「そうよそうよ。事故とかに遭ったらどうするのよ」

「そこで事故を起こさないようにするのが、プロの走り屋なんだよ」
またマスターは一人で頷き始める。

「走り屋にプロもアマチュアも無いでしょうが」はあ、と中羽さんは大きく溜息をついた。

「いや、こう熟練したテクニクを持つ俺みたいな」

中羽さんが、マスターの言葉を強制的に遮って「あのね、和行。

プロとアマチュアの違いつて何か知ってる？」と引き攣った笑みで聞いた。

まるで、調子に乗っている息子を笑顔で叱る母親のようだ。私は、今の中羽さんを見てそう感じた。

幹夫が私を見ていることに気づく。私は幹夫と目を合わせる。私は「どうしたの？」という視線を彼に送る。

「母親が子供を叱ってるみたいだね、あれ」

「やつぱり、幹夫もそう思った？」あの光景はどうみてもそれにしか見えない。

結局、その親子喧嘩はかれこれ十分後に、マスターが「嘘ついてごめんなさい」と頭を下げたことで決着をつけた。

12月20日

「自らに足りない物より、足りている物を見つける方が簡単に決まっているだろうが」
叶野三郎『I can't seeing mirror.』

チャイムの音が聞こえた。私は携帯から顔を上げ、教室の掛け時計を見る。ちょうど、四時限目の現代文が始まる所だった。

現代文？

私ははつとする。やばい、あいつだ。

黒板の方を見ると、教師がもう来ていた。ああ、熱血先生だ。

授業中に「お前らしっかりしろよ！」や「努力した分だけ、未来は輝くんだよ！」と毎授業私たちに熱を山のように分けてくる。きつと本人は、授業を真面目にしているだけのだろうが、私たちにしてみると迷惑そのものでしかない。この授業では知識の代わりに熱が頭に入ってくる。

そういうことがあり、彼は以来『熱血先生』と呼ばれるようになった。

「起立」号令係の誰かが言った。私はまた熱を分けられるのか、と内心で苦笑しながら立ち上がる。

「気をつけ、礼」皆が適当に礼をして席に着き、ざわざわと喋り声がクラスの至る所から聞こえ始める。

「おーし、これが今年最後の授業だ。最後まで真面目に受けるよー」

「はいー」と男子の気の無い返事が、あちらこちらから聞こえる。女子は女子で、机の下で携帯をいじっている。ちなみに、私もその一人である。

私が通っているこの月夜^{つきや}県立高^{たかうち}内高校は、県内で真ん中くらいの偏差値の公立高校である。真面目な生徒もいれば、私のクラスのよ

うに真面目じゃない生徒もいる。数は半々と言ったところだろうか。ちなみにこの高校は、テストの点数でクラスが変わるシステムになっている。このクラスは下から一個上のクラスで、通称『ブービー組』と呼ばれている。このクラスには主に、授業前のテスト対策になると勉強し始める生徒が多く集まっているので、テストが関係ないこの時期になると、誰一人として真面目に授業を受けない。私もその一人である。

「今日は、今年最後の授業だから授業とは関係ないことをしようと思う」そう言っ、熱血先生が用意していたプリントを配り始めた。みんなの目が「また熱いことをするんですか」という目になっている。私もその一人である。

配り終えた熱血教師は「今日は、きやうのねんごう叶野三郎という作家について勉強をしようと思う」と高らかにそう言った。

「えー、マジで」という言葉がみんなの心に響き渡っているんだろう。みんなの顔が曇っている。私もその一人である。

ここでそれを言ってしまうと「お前らは学問を学ぶためにここに来ているんだろ？」と大袈裟なジェスチャーを用いながら、熱く語り始める。一回それをやってしまったことがあるから、私たちはそれ以降何も口にしない。

「それじゃあ、これから読むぞ」と目を輝かせながら熱血先生は言った。

「本当にこのままでいいと思っているのか？」大きくはつきりと感情のこもった声で読み始める。いつも通り、大きなジェスチャーを用いながらだ。

恐らくみんな「どこの劇団員だよ」と思っていることだろう。もちろん、私もその一人である。

「ここで他の路線に乗り換えないと、もう君は永遠に進めないんだよ！止まってしまう事以上に恐れる事なんて、どこにあるんだ！」熱血先生は相変わらず、熱く読んでいた。きつと、作者もこんな熱く読まれるとは思っていなかっただろう。

授業に関係ないことをするなら、寝ていても大丈夫かな。私はそう思い、机に伏せた。

私は気づくと、駅のベンチに座っていた。いや、駅かどうかはわからない。

周りを見渡すと、純白の空間に駅がぼつんと浮いていた。後ろを見ると看板がある。

その看板には真ん中から右と左へ同じ長さの矢印が伸びていた。矢印の上にはそれぞれ文字が書かれていて、右には『未来』と、左には『過去』と書かれていた。

これは何だろう。私はそう考えていると、後ろから「おい、華奈子！」といったもの明るい声が聞こえた。

振り返ると、幹夫が私のことを手を振りながら呼んでいた。幹夫のほうへ近づいていく。

突然、轟音。私は音のほうを見る。

そこには、赤と緑で彩られた電車が左からやってきていた。

扉が開いて、中から私と同じくらいの身長の人が出てくる。

黒いジャケットに柄付きの白いＴシャツを着ている。顔が良く見えないので、年齢が良くわからない。だが服装の感じから、恐らく私と同じくらいだろう。

するとその男の人が「カナ、こっちだよ」と穏やかな声を出した。行かなきゃ。

私は不意にそう思い、彼の下へと走っていく。

「福田っ！ 福田っ！」自分の名前を何度も連呼され、私は起き上がる。

目の前には、眉間が黒に染まるほどにしわを寄せる男がいた。

熱血先生だった。

「お前さあ、寝てるんじゃないよ！ここに何しに来ているんだよ？ 学問を学びに来ているんだろ？」

熱い。そんなに熱を放射したらこっちが溶けてしまう。私は「すいませんでした」と一応謝っておく。

「お前さあ、そんな態度で社会に通用すると思ってるのかよ！ ビッグな人間になれると思ってるのかよ！」

いや、私庶民派なんです。そう人造太陽に言おうとした時だった。

ちょうどいいタイミングでチャイムが鳴った。クラス中に安堵の溜息が響く。やった、日没の時間だと。

「それじゃあこれで、今年最後の授業を終わりにする」

「起立。気をつけ、礼」

みんなが熱に中^あてられて、へろへろと萎れたオジギソウの様に礼をする。

「ねえ、典子ちゃん」私は、机に顔を伏せながら隣に座っている彼女のことを呼んだ。

「え？ 何？」

「私、ご飯いらない」駄目だ、食欲が全くとっていいほど無い。

「ダイエット？ 華奈子ちゃん、すごく痩せてるのに」それ以上痩せたらガリガリになっちゃうよ、と心配そうな口ぶりで彼女は私にそう言う。

「違う違う」私は顔を彼女の方へ向ける。「あいつのせいで、夏バテになった」

彼女は納得した顔をして「ああ」と言った。「あれだけ近づかれたら、しょうがないよね」

『夏バテ』と言うのは、熱血先生の熱に中^あてられて、精神的に疲れて気分がだるくなることである。最低でも、毎時間クラスで一人は被害者が出る。夏場になると、熱血先生の威力が何倍にも膨れ上がり、熱に中てられる生徒が十人強に及ぶ。

「だからさ、ご飯食べてくれない？」

「ごめんっ！」彼女はそう言って自分の顔の前で掌を合わせた。「あたし、ダイエットしてるんだ」

「ふーん」私は疑いの目で彼女を見る。

「な、何よ」

「怪しい」

「何が？」

「だって典子ちゃん前に、女は少し太っている方が男にもてるらしいよ、って言ってたじゃない」彼女が目を見張った。きつと「何でそんなことを覚えているんだ」とでも思っているのだろう。

「い、いや、それでも少し太っている気がしたから……」典子ちゃんが顔を赤らめながらぼそぼそと喋る。

これはあれしかないな。にやりと笑みを作って「ねえ、典子ちゃん」と声をかける。「好きな子が出来たでしょ？」

彼女は耳まで顔を赤くし「し、静かにっ！」と自分の口の前に右手の人差し指を立てる。

「ほーらやっぱり。どうせその好きな子が細めの女の子が好きとか言ってたから、ダイエットしようと思ったんでしょ」

彼女は目を見開き「何でわかったの？」と驚いた。

「恋する乙女はみんなそうなの」私だってそうだった。幹夫に好かれるように、毎朝入念にメイクをしたり、ダイエットをしたりした。ああ、付き合い始めのあの頃が懐かしい。

「というか何で教えてくれなかったのよ、典子ちゃん」私は口を尖らせる。

「帰りに言うつもりだったの！」まったく勘が鋭いんだから、と彼女は軽く溜息をついた。

「で、誰なのよ？ 典子ちゃんの王子様は」

彼女が顔を一層赤くした。「おっ、王子様？」気が動転したらしく、声が思い切り裏返っている。典子ちゃん面白いなあ、と思ってしまう。

「うん。王子様」

「ま、待ってよ。まだその人と付き合ってたことになって無いんだよ？」えへへへへ、と笑いながら彼女は私の肩をばんばん叩いた。

痛い痛い、と私は言うが脳内妄想に夢中らしく、彼女は変わらず肩を叩いてくる。

「で、誰が好きなのよ」

彼女は幸せそうな笑みを垂れ流し「秘密ー」と言った。典子ちゃん、恋する乙女だなあ。

私の目の前に給食が運ばれてきた。クリームシチューが湯気を立てている。まるで「私を食べてください」とも言っているかのようだ。その問いに、私は内心で「ごめん」と返す。

「あのさ、唐突で悪いんだけど」典子ちゃんはそう前置きして話し始めた。「華奈子ちゃんって幼なじみとかいる？」

「まあ、いるよ」

私には、一応幼なじみがいる。いや、いたの方が正しい。今はもう、幼馴染では無いからだ。その人とは、小学校六年のときにその人の親の仕事の都合で転勤して以来、一度も会っていない。

「いいよね、幼なじみって」気のせいかな、典子ちゃんの顔が少し赤らんでいる気がした。私は彼女の王子様は幼馴染だな、と察する。学級委員が前に立って「いただきます」と言って、各々が給食を食べ始めたり、雑談を始めたりする。

「早く、十二月二十三日にならないかなー」はあ、と彼女は好物のクリームシチューを見つめながらぼそっとそう言った。きっと彼女は「食べたいんだけど、彼の為にダイエットしてるんだ。ごめん！」とか内心で言っているんだろう。私たち二人に振られたクリームシチューが、少し可哀想に思えてくる。

「何で？」多分典子ちゃんが王子様と逢う日なんだろうな、と予測する。

「知らないの？ 華奈子ちゃん」彼女は今までの微笑みを一変させ、驚愕の眼差しで私を見た。「十二月二十三日に恋人になった二人はその人と永遠に結ばれるっていう話、聞いたこと無いの？」

彼女は、よくある噂を真剣な顔つきで言った。「そんなのあるわけ無いじゃん」と答えようと思ったが、彼女の顔を見て言葉を選ぶ。

「クリスマススイヴイヴかあ」
「クリスマススイヴイヴだよ」

12月21日

「君は邪魔をしているんじゃないで、僕にそれを教えてくれているんだろ？」

叶野三郎『I can't seeing mirror.』

「イヴイヴねえ」

「そう、イヴイヴだって」私はココアに息を吹きかけながら、少しずつ飲む。

終業式が終わった後、私と幹夫はいつもの喫茶店 C.C.C a f e に来ていた。時間もあるし、デートでもしようかという幹夫の提案だった。

「でも、何でイヴイヴなんだろうね」とふと思った疑問を口にする。「天皇のご加護があるからだろ」幹夫がホットレモンティーを飲みながら答えた。

もっと、こうサントさんの早いクリスマスプレゼントとか、運命とか神様がそうさせたとかはないのか。私は顔をしかめる。「ロマンチックじゃないなあ」

そして同時に、今年のクリスマスは何処に行くのだろうと考える。彼がデートプランを決めているので、何処に行くかは当日にならないと分からない。

彼曰く「彼女が行きたいところを当てられるのが真の男」らしい。実を言うと、当たっているかすごく不安なんだけど。

喫茶店内が静まり返り、ラジオの声が際立って聞こえるようになった。「今週のオススメの本は、叶野三郎さんの『四人と宝』です」

叶野三郎。

何処かで聞いた名前だな、と思い出そうとする。その答えはすぐに思い出せた。そう言えば、熱血先生が最後の授業で熱く熱く読んでいた。

「お、叶野三郎じゃん。オススメの本」

幹夫のその発言に、私は眼を見張る。「え？ 幹夫、本とか読むの？」まさか、彼が本を読むとは。

「どうした？ 華奈子」

「いや、意外だなーって」

「何が？」

「幹夫が本を読むこと」

そう言うと、彼は「俺だって本を読むよ」と口を尖らせた。

「だって、本より漫画とかファッション雑誌を読んでそうじゃん」彼の外見的にはそちらの方が合っている。ひ弱そうな男が柔道をやっていて、しかも帯が黒帯というのと同じくらいギャップがある。

そして、本を読まなさそうな理由はもう一つあった。

「それに、幹夫馬鹿じゃん」

幹夫はテストが返されると「数学の赤点課題、手伝ってー」と私に泣きついて来る。ちなみに彼は、私の一個下のクラス　つまり、一番下のクラスにいる。

「確かに、俺は馬鹿だ。認めようじゃないか」幹夫が苦笑しながら答える。「だが、現代文だけは赤点を取った事が無いんだ」

「うわー、ミッキーお馬鹿さんだったんだー」中羽さんがカウンタ―から幹夫のことをからかう。

「現代文しか出来ないんだよね、俺」頭を掻きながら幹夫は苦笑する。

「そう言えばさ、幹夫は叶野三郎をどうやって知ったの？」

「友達が読んでてさ、それに影響された」

へー、と私は相槌を打つ。「幹夫に読書をする友達がいたんだ」「なんか意外だよな」中羽さんもそう思っていたようで、私に同意してきた。意外ですよな、と私は思わず笑ってしまう。「ちよつと二人とも、それって酷くないですかー？」と幹夫が反論をする。

「私と初めて会った時にそれを言ったら信じてたかも」そう言ってから、あの時の幹夫を思い出した。今考えると、あれは不思議な

出会いだった。

あの日は、鍵を家に忘れてしまっていた。しかもいつもは帰って
るはずのお母さんは、E・A・Pというアーティストのライブに出
かけていて今日は帰りが遅かった。つまり、家に入れない。学校に
行ってもやることはないし、カラオケや漫画喫茶に行けばいいん
だけど所持金は三百円弱でどこにも行けない。ファーストフード店
ならなんとかなりそうだけど、一人でいるのは悲しい。友達を誘え
れば行けるけど、生憎携帯は電池切れ。溜息を吐きながら道を進ん
でいると、一軒の喫茶店が目に入った。『C・C・Cafe』
喫茶店ならば一人でいても不自然には思われないだろう。それに
恐らく三百円くらいあれば、飲み物一杯くらいは飲める。それをち
よびちよび飲んで時間を潰そう。

ドアを押して店内に入る。するといきなり、頭上で綺麗な鈴の音
が鳴った。驚いてそちらを見てしまう。

「いらつしゃいませー！ お一人様ですか？」可愛らしい声に呼ば
れた。声の方を見ると、ウェイトレスさんがにこやかに私を見てい
た。

綺麗だなと思った。皮肉や嫉妬など関係無しに、素直に。少し幼
げな顔に、黒いロングの髪が似合っている。服装は、白色のYシャ
ツ、薄茶の膝下スカートに、濃い緑のエプロンだ。とても綺麗にま
とまっている。胸元のネームプレートに『中羽』と書かれているの
が目に入った。

「え、あ……一人です」初めて来たお店なので緊張する。その所為
かいつもより少し声が小さく、ウェイトレスさんに届いているか不
安になる。

「はい。では、カウンター席でもよろしいでしょうか？」返答が来
て私はほっとする。良かった、伝わっていた。

「は、はい」

「こちらへどうぞ」と中羽さんに席を案内される。

案内されたのは、五つあるカウンター席の内の入り口から見て奥から二つ目の席だった。窓が近く、お店のマスターとも程よい距離という場所だ。

マスターは、黒い長袖のＴシャツにベージュのエプロンを着ている。パンツはこちらからは見えないので、よくわからない。顎に髭を蓄えていて、目がきりつとしている。何と言うか、怒らせたら怖そうな人だ。エプロンにつけられているネームプレートに『東野』と書かれている。

店内には、私の隣の隣にいる男子学生がしかお客さんがいなかった。しかも、私と同じ高校の。同学年だろうかと思い、いつもの癖で靴を見てしまう。だが上履きを履いているわけが無く、学年はわからなかった。少し長い茶髪はちゃんとワックスでいじられていて、ふわっと髪の毛が軽くなっている。顔をちらっと見る。何と言うか、優男という感じが全面に出ている。顔はまあ整っているけど、ナンパとかを進んでしようとする人では無さそうだ。優男さんはちやちやらした外見の癖に、静かに勉強をしていた。宿題だろうか、はたまた明日の授業の予習だろうか。

「ご注文はどうします？」カウンター越しに中羽さんが尋ねてくる。「えーっと……」そう言われて、私はテーブルの上にある写真立てのような物を見る。そこには写真の代わりにメニューが入っていた。商品名よりも、値段の方に目が行く。三百円以下、三百円以下を探せ。

結局あったのはコーヒーとミルク、オレンジジュースぐらいだった。私はおとなしくオレンジジュースを頼もうと思った。

「ちなみに今日のお薦めは、アイスココアです」

ココア。その言葉に反応してしまう。私は、ココアがすごく好きなのだ。今日は夏が近づいてきたからか、普段より少し暑かった。こういう日は、喉がすっきりしてそれでいて、冷たく甘いアイスココアが飲みたくなる。

メニューを見る。アイスココア。単品Mサイズで計四百二十円也。

残念ながら、百円ほど足りなかった。念の為に財布を確認する。

くそつ、さつきと全く持って変わっていない。飲みたい気持ちを、値段が邪魔する。

「あ」マスターの東野さんが想像通りの低い声を出した。おい、コア飲めよ。うちのはうめえんだぜ、と脅されるのだろうか。びくびくと怯える。「お客さん、初めてうちに来たでしょ」

脅しとかでは無く、普通の言葉だったのできよんとしてしまう。至って普通の、マスターの言葉だ。「え、ええ。はい」

「なら、割引効きますよ」

「へ？」

「うち、初見さんは三割引きなんですよ」一瞬の間。マスターと見詰め合った。すると、マスターが途端に微笑んだ。

何て良い人なんだ！ 私は心の中で叫んだ。私が小銭を確認する様子を見て、きつとお金で悩んでいる事を悟ったんだろ。それにさつと助け舟を出す。全然怖い人なんかじゃない。むしろ、良い人だった。

四百二十円の三割引きなら、恐らく足りる。よし、と心の中でガッツポーズをする。

「じゃ、じゃあ、アイスココアで」

「かしこまりました」そう言って、マスターがせつせと動き始めた。ふと、私は店内に木が原材料のものが多くあると感じた。壁もテーブルも、椅子も時計もキッチンも。ほぼ全てが木で出来ている。深呼吸をしたら、木の香りが吸える気がした。

「ねえ、もしかして月夜高校の学生さん？」中羽さんにそう尋ねられる。制服で分かったようだ。

「あ、はい」

「実はね、あそこの彼も月夜高校の学生さんなのよ」席を一個隔てた彼と目が合った。どうも、と私は軽く頭を下げる。彼はワントンポ遅れてから頭を下げた。

「ミキ才君、何年生だっけ？」中羽さんがミキ才君とやらに尋ねる。

「二年です」教科書から目を上げ、そう中羽さんに言った。言った後、教科書に目を戻して黙々と勉強を始めてしまった。

同学年か。それにしても見たことが無かった。恐らく一組とか二組の生徒だろうな、と考える。私たち底辺のクラスの生徒は、あまり上辺のクラスの生徒に近づこうとしない。きつと、私たちが『底辺』というレッテルを貼られているのを気にしているからだろう。あつちも無理に近づこうとしていないのか、はたまた見下しているのかわからないが、私たちに近づいてこない。

「あなたは？」

「私も二年です」

「同学年じゃない！」彼女は手を叩いた。その仕草がとても可愛い。きつとこのお店には、中羽さん目当てで来る人も少なくないんだろうな、と思う。

すると、彼が教科書やノートを片し始めた。私、何かまずい事をしたかな、と罪悪感が胸を占め始める。やっぱり、彼らは底辺クラスを嫌いなんだろうか。

勉強道具をバッグに詰め込んだ彼は、立ち上がって中羽さんに幾らかお金を渡した。

「はい、七百二十円ちょうどいただきました」中羽さんはその代金をエプロンのポケットに入れた。

「はい、お待たせしました。アイスココアです」マスターが木製のカップを私の前に置く。カカオの香りが、冷気と共にふわっと香ってくる。

さあ飲もう、と思ったときだった。

「あの！」入り口辺りから声が聞こえた。そこには、さっきのミキ才君がこつちを向いて立っていた。全身に力が入っていて、まるで口ポットみたいだった。

視線から考えて私だろうか。一応返事をしておく。「……はい」「な、何か……」そこで彼はすうつと息を吸って、はあつと息を吐いた。「何か、悩みがあつたら相談してください！ 相談とか、乗

りますから！」

そう言つて、彼は店を出て行つた。ちりと、鈴の音が鳴つた。

「何でだよ」と幹夫が唇を尖らせる。

「いや、黙々と勉強してたし」今考えると驚きだよね、と幹夫をからかう。

「華奈子ちゃん、あれ勉強じゃなくて赤点の課題だからね」

「そうだったんですか！」その言葉で貴重な彼の真面目君イメージが崩壊していく。さらば、真面目な幹夫。

「それより私、ミツキーの捨て台詞に笑われたね」中羽さんはその時の事を思い出したのか、突然笑い出した。「悩みがあつたらつて、あんたはカウンセラーか！」

「新手のナンパですよ」

「いや、ナンパって気づかないと思うよ、それ」確かに中羽さんの言うとおりだ。むしろ、カウンセリングの勧誘にしか思えない。

「あの後私たち三人、ぽかーんって口開けてたよね」

「何が起きたのって感じてしたね」

「華奈子ちゃんはミツキーと初対面だから勿論びっくりするだろうけど、私たちもびっくりしたよ。え？ 相談つて？ ミツキー、カウンセリング始めたの？ みたいな」

「俺はそんなナンパ聞いたこと無いぞ、って思ったけど」どうやらマスターはあれがナンパだとわかつてたらしい。あの勧誘でナンパだと分かるなんて、男の人の想像力つてすごい、と感心する。

中羽さんが即座に「そんなナンパする人いないから」と突っ込む。そしてすぐに幹夫が「ここにいますよー！」と手を上げた。そのテンプの良さに、笑ってしまう。

「でも、あの謎の勧誘のお陰で色々私たちと話せたよね」にこつと中羽さんが微笑んだ。うわあ、可愛い。その可愛さに敵わないけど、私も中羽さんに微笑みを返す。

「ですね。あれが無かつたらもう来てなかったかもしれません」

「そう考えると、ミツキーの捨て台詞って意外と役に立ってるね」
幹夫はその言葉に「意外って酷いなあ」と苦く笑った。「あ、そう言えば俺がいなくなったら後ってどんなこと話してたんです？」
「あれって告白？　って話してた」意外と普通だなあ、と幹夫がこぼした。

「で、どうするのー？　って私が問い詰めてた」

「華奈子、なんて答えたんですか？」どうやらあのナンパで私の気が惹けたか気になるらしい。ごめん、と先に心の中で謝しておく。

「即答でごめんなさい」

「マジかー」と幹夫が残念がる。「あのナンパじゃ駄目だったかー」
「残念がる所そこ？」あまりにもずれていたので思わず指摘してしまう。私の言葉に幹夫は「うん」と当然のように答えた。

「でもね、華奈子ちゃんちよつといいこと言ってたよ」中羽さんが右手の人差し指を立てた。なんか言っていたつけ、と私は思う。

「何ですか！」身を乗り出して幹夫が食いつく。

「でも、機会があったら相談乗って欲しいですね」ああ、と私は思いうす。そう言えば、そんなこと言っていた。特に悩みは無かったが、なんとなくそう思った。

「そっちかー」と幹夫はまた残念がった。幹夫は面白いなあと思うながら、少し冷めたココアに手をつける。

扉を開いて外に出ると、冬の寒さが私を襲った。私の息が白くなつて暗闇へと吸い込まれて行く。手を擦り合わせ、摩擦の力で手を温める。

「ありがとうございますー」

中羽さんが手を振るので、微笑んで手を振り返す。
帰るため、寒さに震える身体で高内駅たかうちへと向かう。

高内駅は堵坂線とさかの上りが二つ、下りが二つの四番線ある駅だ。この駅は普通電車はもちろん快速電車も止まる。堵坂線は普通電車と快速電車しか無いので、高内駅では必ず電車が止まるのだ。

腕時計を見る。今の時刻は八時だった。ここから駅まではあまりかからない。電車に乗る時間を考えると、九時までには家に帰れそうだった。

喫茶店のあった住宅街を抜けると、神棚商店街かんだなに出た。夜の人気のない商店街は、店のシャッターが閉まっていても不気味だった。海外のホラー映画でよくありそうな場面だな、と思う。

「寒いな」幹夫がそう言って首をすくめた。

「うん。寒い」彼が私の手を握り締める。彼の手もまた、冷たかった。

高内駅が見えてきた。普通電車がちょうど駅から出て行く。先程時間を見たとき八時だったので、恐らくあれは八時五分発の普通列車だろう。頭の中で、臆気おぼろけに覚えている時刻表を思い出す。次は確か、十分後くらいに来る快速のはずだ。

駅に近づいていくにつれて、コンビニエンスストアや銀行などの施設が現れる。徐々に、ホラー映画の面影は消えて行く。

「なあ、華奈子」幹夫が沈んだ声で話し始めた。

「どうしたの？」

「あのさ……」彼が口ごもる。そして、握っていた手の力を抜く。その所為で、手が離れる。その姿を見て、私は悟る。「別れないか？」

「……もしかして、冷めた？」穏やかに、そう問いかける。

彼は、その言葉を聞いて目を見張った。「何でわかったんだ？」

「私も、冷めてきてたからさ」苦笑しながらそう答える。

「……そっか」

「うん」

駅まではおよそ五百メートルくらいある。時間にすると、五分ほどだろうか。

別れ話をするには、少し短い気がした。

「俺らってさ」彼が口を開いた。「多分、友達止まりだったんだよね」

そうか、と私は納得する。私たちは、友達止まりだったのか。幹夫と一緒にいた時間は楽しかった。それは偽りではない。けど、その時間は愛おしくは無かった。きっと、その時間を愛おしく思えていたなら、こんなことにはなっていなかったんだろう。

いつも、何かが足りなかった。

私はいつもそのことについて考えていた。けど、今ならわかる。それは、ときめきだ。

そりゃあ、冷めるわけだ。私は、心の中で自嘲気味に笑った。

高内駅に着く。私たちは、自然と立ち止まった。

「幹夫」

「……何？」

「今まで、ありがとう。一緒にいた時間はすごく楽しかった」
明るく笑う。

私は哀しくないよ、と伝えるために。

だから、そんな泣きそうな顔しないでよ。

「一人で背負っちゃ駄目だからね。自分の所為で別れたと言ったら、殴るからね」わざとおどけて、人差し指の先を彼に指す。「これは、二人が悪いんだからね」

「……うん」

哀しく、傷ついたような顔。

私はああ言ったが、きつと自分の所為だと思い込んでいるんだろう。改めて、幹夫は優しいなと思う。

「別れてもさ、友達でいてくれよ」

笑って彼はそう言った。けど、幹夫は上手く笑えていなかった。

ああ、お別れか。

「……当たり前よ」

あつけなく、終わってしまった。

「あのさ、もう電車来るから行かなきゃ」
手を振る。

「幹夫、バイバイ」

「ああ、バイバイ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5925z/>

Destiny love

2011年12月21日22時52分発行